

周作人研究の専門家，エッセイストの止庵について

蔭 山 達 弥

〈Summary〉

His name is Zhi An (止庵). Zhi An is well-known as a great reader, a writer, a scholar on Zhou Zuoren (周作人) and Zhang Ailing (張愛玲). It was by mere chance that I got to know his name. I respect his personality. After forty, Zhi An wrote a large quantity of book review, published over 20 books. Compilation for him is a result of his reading. It is better to edit himself than to make do with bad edition. He said, "First, buy books, Secondly, read books, Thirdly, compile a book, Finally, write." In my manuscript, introduced Zhi An, who is a great reader, a writer, a scholar on Zhou Zuoren and Zhang Ailing.

1. 生粋の読書人，止庵

止庵（本名王進文）は1959年北京に生まれた。7歳の時，文化大革命に遭遇し，家の中の書物は紅衛兵に没収され，まる十年飢えや渇きの状態にあった。当時の最大の願望は一冊の辞書を持てることであったが，かなわず，『毛沢東選集』の後にある注釈を読んで，国語と歴史の知識を増やした。

1977年，北京医学院口腔系（現在は北京大学口腔学院）に合格，通学のバスの車内で少なくとも読んだ。座席のない時は，立ったまま読書し，車内が混みあって耐え難い時は，書物を高く揚げて，バスの天井に貼り付けても，読み間違えなかった。

卒業後，止庵は二年間歯科医をしたが，自分に向いていないと思い，『健康報』に移動し記者になった。当時，止庵は新聞や雑誌に詩や小説を発表し始めており，ペンネームは方晴だった。しかし，文学が最も盛んな時代に，止庵は下り坂に陥った。「何もやりたくないし，何も書きたくない。」毎月，数十元の給料では，生活はとても逼迫し，「友人にご馳走しようとしても，毎月一度だけだ。」

1989年は止庵にとって意義深い一年だった。その年，止庵は離婚した。一ヶ月後，外資系医療器具販売に転職し，11年間働いた。止庵はこの経歴を決して後悔していない。何年もあとにオーウェル（George Orwell, 1903-1950）の伝記を読んだ。オーウェルは若い頃，貧乏して打ちひしがれていたが，妻は彼に良くしてくれた。彼の『動物農場』（Animal Farm, 1945）が出版され，有名になると，妻はこの世を去った。

止庵は言う。「生活にはある種の深い力がある。以前は何故かしら起動できなかったのに，あとからゆっくりと動き出した。乗客がすでに降車したにすぎない。」

1995年止庵は再び元の家業をし、昼間は出社し、夜は家に帰って執筆した。ある日、突然一人の出版商が現れ、止庵に本を出して欲しいと言った。最初の本『樗下随筆』はこのようにして世に出た。「樗」は荘子が言った大きくて役に立たない木だ。止庵の家の中にも本当にこの木があった。それから、堰を切ったように、止庵を訪ねて本を出版する人がひきもきらず、会社に在職中、五六冊出した。

2001年、止庵は職を辞し、フリーの作家になった。しかし、止庵は常々考えていた。限られた時間で執筆して本を読まないのは、結局価値があるだろうか。止庵はやはり一介の書生、中国式夏用のシャツを着、黒の布靴を履いて、生活は質素だ。本やディスクを買っても、コストに入れない。人生を語る時、止庵はカミュ（Albert Camus, 1913-1960）の言葉を引用する。「重要なのはより良く生きることではなくて、より多く生きることだ。」¹⁾

2. 止庵というペンネームについて

止庵は自身のブログ、『止庵の日誌』2012年9月3日、表題『財新網記者の質問に答える』の中に、宋宇記者が止庵というペンネームについて問い質す箇所がある。（以下訳）

宋宇：皆はあなたのペンネームにわりと興味を抱いている。あなたはあなたの文章の中でも説明しているが、ここでもう一度おっしゃって欲しい。

止庵：私はあの頃、ある会社に勤務していて、他人に私がものを書いていることを知られたくないので、名前を伏せて、注意深くつけもしなかった。この名前は、その頃ちょうど『莊子』を読んでいて、いつも「止」という字が出る。その中に「人は流水に鑑（かがみ）すること莫（な）くして、止水に鑑（かがみ）す。唯（た）だ、止（し）にして、能く衆止を止（とど）む。」という件がある。（『莊子』内篇、徳充符篇第五）意味は「人は流れている水面を鏡とはしないで、静止した水面を鏡にする。静止しているからこそ、他の多くの静止したものを止められるのだ。」この境地はすばらしい。だから、この名（「止」）を書いたのだ。

宋宇：庵というのはどういう意味ですか。

止庵：庵は藁の小さな小屋、とても面白いと思ったからだ²⁾。

同じ止庵のブログ、『止庵の日誌』2006年11月17日、表題『私のペンネーム』を読むと、止庵というペンネームは二番目のペンネームだということがわかる。（以下第一段落、第二段落の訳）

私は文学創作を志すようになって久しい。最初はいい加減に少しだけ書いたが、まだ発表したことはなく、ペンネームの必要はなかった。1979年、父が何首かの短い詩をある刊行

物に代りに送ったところ、掲載する予定との返事が来た。その頃私は大学で医学を学んでいたため、他人に知られたいくなかった。父はそこで方晴という名前をつけた。“方”は私の幼名で、“晴”はその頃の政治情勢を暗喩している。私自身はあまり好きではない。けれどもそれから詩や小説を書く時はずっと使ってきた。1993年私の詩集が出版されてもこの名前を使った。それから随筆を書くようになり、“止庵”というペンネームを使うようになった。一番早く使ったのは、『新民晩報』に発表した『探訪八道湾』という随筆で、おそらく1980年代末のことだ。父は私が名前を変えたことにあまり賛同しなかったが、私は先人が「今日の私が昨日の私に挑むことを惜しまない」のに、名前を代えても、何の差支えがあろうかと思った。

『楞下随筆』は私が止庵と署名して出した最初の本だ。そのころ、わざわざ『止庵は言う』を書いた。『莊子・徳充符』に云う。「人は流水に鑑（かがみ）すること莫（な）くして、止水に鑑（かがみ）す。唯（た）だ、止（し）にして、能く衆止を止（とど）む。」私はこの意味が好きで、以後文章を書く時、それ（止）をペンネームにした。私はいつも自分を冷静に、騒がず、控えめにするように戒めたく思っている。軒、堂、齋などは私にとって盛大なのが嫌で、私が想像する読書の場所はただ庵——荒れ果てた小さなわらぶき小屋にすぎない。『莊子』に「止」の字は多く見られる。ここで言っている意味は比較的複雑である。私が『楞下随筆』を書いた時、かつて解釈して述べた。「道は一種の自然状態であり、天地万物に遍く在ると理解されて差し支えない。他人が道の体現者が体現した自然状態を目にすると、それによって自身の自然状態を体得し、道も手に入れるのだ。「人は流水に鑑（かがみ）すること莫（な）くして、止水に鑑（かがみ）す。唯（た）だ、止（し）にして、能く衆止を止（とど）む。」は、鑑するところの止によって、自身の止を目にするのだ。道の体現者として、人、或いは大自然、或いは他の何でも何ら区別はなく、すべて鑑とすることができるのである。『莊子』の他のところで、止にはまたそれぞれ境界があると述べている。去年、友人に頼まれて、「今子止」、「吉祥止止」、「其动止也」などの戯れの印を彫った。その他「听止于耳、心止于符」の二句も非常に気に入っているが、残念だが未だ彫り上げていない³⁾。

3. 本の編集：する価値のない「損をする商売」

本の編集は止庵について言えば、本当に読書の副産物である。好きな本に良い版がなければ、自分から編集するほうがましである。止庵はかつて言った。「周作人に関して、皆が何か言おうとするなら、先に周作人が書いた本や訳した本を読んでからにすると良いといつも思っていたが、目下一番不足しているのはこれらの著作の整理や出版の方面である。これは周作人の一読者としての心からの言葉である。私が十数年来この方面の仕事をしているのは、自身の必要を真っ先に満足させるためである。私は文科系で学んだことはなく、また大学や研究所で働いたことはない。

この種の仕事をするのは甚だたやすいことではない。もし誰かが先にやってくれば、私は喜んで座して人の成果だけ受け取る。私が廢名の本を編集したのも、このようである。しかし、しかし、廢名の本は古い新聞・雑誌に散見されるが、いまだ集められておらず、調べてさがすのもたやすくはない。ある出版社が一揃いの『散文全編』を刊行し、私はずっと廢名が入ることを待ち望んでいたが、いかんせん長く待っても無駄だった。結局、一冊、『廢名文集』を自分で編集するしかなかった。廢名には『阿頼耶識論』なる著書があり、長く放置されていたが、私の手で始めて出版にこぎつけた。私は一読者として（再三にわたって言うのをお許し願いたい）、たまたま出版に踏み出し、何種類かの未だ世に出ていない本を出版する機会を得た。光栄に感じるというよりも、いささか憂慮していると言う方がました。私は数十年前のあの文化大災害を経験している一人であり、先人の心血が一日で壊れるのを目の当たりにしている。今、活字に印刷され、それを読みたいと思う人は大勢いるとは限らないが、最後には何らかの災難で伝承が途絶えずに済む。」

止庵が周作人の作品にいち早く触れたのは1986年、最初はちょっとした興味がそうさせたにすぎないが、以降校訂整理に着手し、何度もくりかえし読んだ。前後して『周作人自編文集』、『苦雨齋訳叢』、『周氏兄弟合訳文集』などを出版し、全部で七、八百万字、関連する資料もたくさん読んだ。…

「私が周作人を編集して、これまで金儲けで始めたことはない…」止庵が指しているのは十数年前に出した『苦雨齋訳叢』第一集である。以降編集した本は、編集費があるけれども、とても少ない金額だ。外資系企業に十一年勤めて、出版社の副編集長した止庵にとって、編集によって金を儲けようと強く望んでいない。「そのようであるなら、それ（編集）を遊びとし、面白いことにしたほうがいい。」⁴⁾

4. 『周作人傳』

止庵は伝記を好んで読む。ただこの種の本を買う時、出典が明らかでない対話や「彼は～と考える」とかが有るものは、例外なく要らない。これが止庵のいわゆる「伝記文学」に対する態度である。止庵自身が伝記の執筆に取り掛かる場合、当然、このルールを守ろうとする。

止庵は『周作人傳』の序文の中で次のように述べている。

私はかつて「伝記」と「伝記小説」を同一視して論じてはいけないと強調したことがある。伝記はノンフィクションの作品に属するものであり、書くことは事実であり、出典がなければならぬ。他人の記載を引用する場合、事実を確認せねばならず、この最低ラインだけは簡単に動かすことはできない。伝記を書く場合、歴史を書くつもりで、「合理的な想像」や「合理的なフィクション」は許されない⁵⁾。

これを一言でまとめるならば、止庵は「伝記文学」を書かない。たとえ「文学的な味わいが少なくても」、「無味乾燥であっても」、止庵にはどうでもよい。

止庵はかつて、伝記を書く場合、次の四点が平均して重要だと述べたことがある。

(一) 材料；(二) 考え方；(三) 深く切り込む角度と取捨選択；(四) 文を書く能力

但し、後者の三点はすべて第一番目の基礎となり、これがまさに止庵が『周作人傳』を執筆する困難なところである。止庵は『周作人傳』の序文の中で次のように述べている。

次々と『周作人研究資料』、『回望周作人』などの書籍が世に出たが、周氏の一生の経歴の材料はやはり非常に乏しい。

- (一) 日記は今日まですべて刊行されていない。
- (二) 書簡の収集整理が不十分
- (三) 個人データが公表されていない
- (四) 当時のニュース報道、訪問記、印象記はまだ取りまとめて出版されていない
- (五) 後の回想の文章が事実誤認で訂正もされていない

このような困難な状況で止庵は『周作人傳』を執筆、出版したのだが、黄集偉は『周作人傳』の書評の中で次のように述べている⁶⁾。

『周作人傳』の中で、周作人の1949年から1967年までの生活の内容を叙述するのが、一番書きにくかったはずだ。第9章においてである。ページ数を数えたが、この章は39ページを占め、およそ3万3千字あまり、注釈は300近くある。…この注釈密度も同時に同書の特徴である。1949年から1967年の間の周作人は最も気まずい、最も経済的に逼迫した、最ももつれ合った周作人であったことは間違いない。この時期を書くにあたって、作者止庵は相当ためらっている。一人の敏感な人間の敏感な時代の衣食住行為を再度述べ、その心情ひいてはもつれ合いを復元するのは、秘密のような難題である。まさにこの部分に、止庵の力量、信念と根気がとりわけはっきりと分かる。止庵は、いわゆる「文抄公」式（文を丸写しする方法）の伝記法則はそれによって貴重さが鮮明になると自嘲している。「根拠のない文字は一字とてない」というような使い古した言葉で本書を褒めても良いだろう。周作人研究をテーマとする何種類もの研究書が一冊一冊出版されたあとで、この伝記の出版が道を開いた。私の考えでは、聴いてみると良く響くには不十分だが、この言葉が最も適切な褒め言葉である。

5. 『周作人訳文全集』の出版

『周作人訳文全集』の整理事業は1997年に始まった。止庵は『知堂回想録』が提供する手がかりに依拠して、周家に周作人の『ギリシャ神話』の原稿について問い合わせた。出版されていない原稿を整理出版しようと考えていると、思いがけず、この作業が進むにつれて、止庵は周作人の大量の直筆原稿と周作人が人民文学出版社で出版した版本との不一致を発見し、このことが止庵に周作人の訳文の直筆原稿を系統だって改めて整理しなおすきっかけとなった。

止庵は説明して言う。編集校訂作業の難しさは主に次の三点から来ている。一つ目は文書の検索である。止庵が検索した一番早い書物は1905年に出版された翻訳作品である。さらに90年余り前の原文の直筆原稿がある。資料の出所の比率はだいたい周家が提供してくれた直筆原稿が3分の2を占め、様々な書物を通じての友人、蔵書家が提供してくれた異なる文書が3分の1を占める。止庵は言う。十年以上大勢の人の手助けを得て、止庵は深く感謝している。

二つ目は校訂作業である。直筆原稿と出版後の表に現れた姿が異なり、出版されても異なる版本が存在する。これらの異なる文書の比較と選別は、議論と思案を通して、周作人の本意に一番合う版本を見つけることだが、このことは止庵に相当な思案を費やさせた。周作人が「誤訳」した箇所遭遇したらどうするのか。止庵の原則は、これは周作人の訳であり、編集校訂者がやらなければならないことは、全面的にありのままに周作人を表に出すことである。改める場合ももちろんある。例えば、『周作人訳文全集』第7巻の『如夢記』（原題『夢の如し』）は全9章、当時9回に分けて、新聞に連載されたものであり、まとめて出版されていない。その中の第5章に、ある人を“八重姑”と呼んでいるが、第7章になると“八重姉”，“八重姐”と言っている。止庵は日本の友人に（日本の）図書館に行って原文に当たってもらおうよう頼んだ。そしてそれらが使っている語は同じ語であり、指しているのは同一人物であることが証明された。連載が断続的に続いたので、前後の訳名の違いが生じたのだ。止庵は「後者は前者に従わない」原則に基づいて、“八重姐”に統一した。このような明らかな不一致を除いて、その他の箇所は、たとえ周作人の翻訳が不適切で、正確でなくても、すべて直さなかった。

最後の一つは編集の難しさである。エウリーピデース（Euripides, BC484?～406）とアリストパネース（Aristophanes, BC445?～385?）の文学的な地位は相当なものである。しかし、周作人はエウリーピデースの悲劇を13冊、アリストパネースの喜劇を1冊訳した。エウリーピデースは単独で1冊になるが、アリストパネースは不可能、明らかに1ランク低くなるのは、適切でない。止庵は笑って言う。「これは行政と人事の仕事のようなものだ。」誰と誰と一緒に並べ、どれとどれを対応させるか、この仕事は止庵と責任編集者である張鐸の編集能力と頭が試されている。

どのように言われようとも、止庵は十五年にわたって、周作人の直筆原稿と版本を広く探し求め、最もふさわしい底本を選別し、その他の本と校勘し、構成がそれぞれ異なる数十冊の単行本と数篇の文章を編集校訂し、これを一つの合理的で適切な全体に極力しようとした。現在姿を現した11巻の『周作人訳文全集』は、3分の1近くの内容は原本が初版の後、数十年にわたって

絶版であった。あるいくつかの材料（第8巻“其他日文译作”《瞎子做梦》1万字余り、桂文楽の落語『心眼』の中国語訳）はこれまで世に出ることはなかった。今回、43ページの直筆原稿が印刷された。全巻がめざしている目的は、周作人という翻訳の大家の風貌を表にだすことであり、それは成しとげられた⁷⁾。

6. 周作人が止庵に与えたもの

止庵がいち早く周作人に触れたのは、1986年、それ以前に読んだのはすべて比較的感情に訴えるものであったが、突然一人の落ち着いた穏やかな作家に出会い、とても不思議な感じがして、一種の文体上の衝撃だった。周作人が最も止庵に与えた影響は周作人が文章を書く時の態度である。文章を書く時、話をするように書く人もいれば、講演するように書く人もいる。講演は観衆の気持ちを動かそう、扇動しようとする。だが、周作人は友人同士の会話のように文章を書く。

「良い思想は本の上に書かれているが、少しも実現したことがない。悪いことは世間でみんな行われたのに、本の上にはごく一部しか記載されていない」と、周作人は言っているが、この言葉は止庵が一番敬服している言葉であり、周作人の思想の極致だとも言っている⁸⁾。

止庵はなぜ15年もの年月を費やして、『周作人訳文全集』を編集したのか。そのいきさつについて、止庵は二つの部分に分けて言う。最初に、このことは必ずしも私がやらなくてもよい。私がかもし一読者として、誰かが編集してくれるのであれば、やはり一読者でいるのが一番いい。なぜなら編集するのは骨が折れるからだ。もし、当時誰かが訳文全集を編集するなら、私は編集をしないだろう。しかし当時はそのような人間がいなかった。二番目になぜ周作人なのか。最大の長所は繰り返し読めることである。繰り返し読むに耐えられる本はそんなに多くない。しかも今まで読んでもうんざりしない。私の仕事が一段落したと言うだけだ。この歳になっても遊びに出かけ、人生も少しは変えないといけない、しかし読むに耐えるということが、とても重要な基準であり、読むに耐えるという本は確かに存在する。

もう一つ、このことをするにあたってやはり価値があるかどうかで決まるものだ。民国の時期を例にあげるなら、私と王世家氏が一緒に魯迅の本を編集して、何遍も読んだ。さらに張愛玲の本も編集したが、彼らは確かに値打ちがある。私はこう思う。人は世界のあらゆる本を読むことはできない。これはピラミッドにたとえられる。読むならその先端を読む。私が基礎の部分から読み始めたら、半分も読まないうちに一生は終わってしまうと、誰かが言うから、私は直接ピラミッドの先の部分を読んだほうがましだと思う。エマーソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-1882）が言っているのも、この意味である。読書も良い、書物の編集も良い、研究も良い、すべて研究するに一番値するものを選んで研究せよ。だから読書には識見が必要で、そうでないと無駄になってしまう。私は、やはり自分の一生を使って一番良い本を読みたい。この世に別れを告げる日には、世界で一番良い本を読んだと言えるなら、一読者として一番満足するところである⁹⁾。

7. まとめに代えて

止庵の読書はだいたい二つの方向に分かれる。一つは現代文学で、しかも、周作人、廢名、張愛玲などに集中している。もう一つは先秦哲学で、『莊子』、『論語』と『老子』に集中している。止庵は以前次のような冗談を言った。先秦哲学は結局のところ、人に関するものである。『莊子』が一個人の哲学・「私」でもある。『論語』と『老子』が語っているのは二人の哲学である。「私」の他に、「あなた」と「彼」がいる。孔子から見れば、もう一人は善人だが、『老子』の作者から見れば、悪人である。先秦の思想家は三つの流れに分けられる。例えば、孔子の流れに、孟子、荀子がいる。老子の流れに孫子、韓非子がいる。ただ莊子だけが自らを語っている¹⁰⁾。

止庵は『自述』の中で「ふだんは本を買うのが第一、本を読むのが第二、本を編集するのが第三、本を書くのが第四。」と言っているが、止庵の姿勢には、我々が見習うべき点が多々ある。

注

- 1) 刘子超「止庵 藏拙或不拙，说话或不说话」（『南方人物周刊』2009.10.27）
<http://www.infzm.com/content/36468>
- 2) 「答财新网记者问」2012.09.03（『止庵的日志——网易博客』）
<http://zhian.vip.blog.163.com>
- 3) 「我的笔名」2006.11.17（『止庵的日志——网易博客』）
<http://zhian.vip.blog.163.com>
- 4) 「止庵：只想做一个读者 编周作人是从不拿钱开始的」（『北京日报』2011年9月20日）
<http://www.chainanews.com/cul/2011/09-20/>
- 5) 「周作人传 自序」（『新浪读书』2008年12月25日）
<http://book.sina.com.cn>
- 6) 「还原最纠结的周作人——读止庵《周作人传》（黄集伟）」（『中国青年报』2010年01月19日）
<http://www.chinawriter.com.cn>
- 7) 「唯暮年所译，识者当知之——止庵谈《周作人译文全集》的出版」（『中华读书报 书评周刊』2012年5月16日）
- 8) 刘子超「止庵 藏拙或不拙，说话或不说话」（『南方人物周刊』2009.10.27）
<http://www.infzm.com/content/36468>
- 9) 「答财新网记者问」2012.09.03（『止庵的日志——网易博客』）
<http://zhian.vip.blog.163.com>
- 10) 「读书，写书与编书」（『止庵的日志——网易博客』）
<http://zhian.vip.blog.163.com>